第12回みんゆう新聞感想文コンクール作品紹介

中学生の部 優秀賞

コロナ禍での夏休み

郡山一中2年　星（ほし） 映地（えいじ）

毎日毎日、新型コロナウイルスの話題が新聞にたくさん載っています。心配になったり、悲しくなったりする記事が多いですが、とても温かくなる記事を見つけました。福島市で開催される東京五輪ソフトボール・野球競技に関する記事です。福島市の高校生たちがボランティアで、オリンピックで訪れた外国人に英語で道案内や観光案内などをする予定でした。しかし、新型コロナウイルス感染拡大の影響で無観客開催となったため、ボランティア活動なども中止となりました。

この記事は、地元の高校生たちがオリンピックのボランティア活動で大活躍した、という記事ではありません。地元の高校生たちが一生懸命ボランティア活動の準備をしてきたけれど、新型コロナウイルス感染拡大の影響でボランティア活動が出来なかったという記事です。僕はその部分に興味を持ちました。僕たちも毎日の生活の中で、一生懸命がんばったけど出来なかったとか、長い時間をかけて準備したけれど中止になったということはあります。特に新型コロナウイルスの影響で学校の部活動や行事がそのような状況でした。しかし、がんばってきたことや準備してきたことは決して無駄にならないと思います。その過程が自分の知識や経験として積み重なっていくとこの記事が言ってくれていると感じました。がんばっていることをきっと誰かが見ていてくれていると思えてうれしい記事でした。取材された高校生も、「準備のために勉強してきたことは無駄じゃないと思っています。」と言っています。また、外国人を楽しませようと準備してきたことで、「私たち自身が福島を知り、学んできた」という言葉がとても前向きで明るくなる話題でした。

新聞の見出しは、とても目に入り影響力があると思います。夏休み中のお盆の頃、新型コロナウイルスの感染者数が増え、新聞に大きく感染者数や過去最高という言葉が載りました。車で十分くらいの場所にある祖父母の家にも、お線香をあげるだけにして、食事会は中止にしました。新聞の見出しにはそういう力があると思いました。不安な状況が続きますが、だからこそこの高校生の「準備、無駄にならない」という見出しは、明るくて希望の持てる見出しだと思いました。無駄になることは何もないから僕も失敗を恐れずに、部活や勉強をがんばろうと思えました。

思いのバトンを

郡山一中2年　斎藤（さいとう） 颯（そう）

八月十日の新聞に、「福島にエール」という見出しを見つけた。写真や他の見出しは、長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典の内容であるのに、福島県とどんな関係があるのか興味がわいた。

長崎は、原爆投下から今年で七十六年目をむかえる。その長崎が、東京電力福島第一原発事故の年から約十年間、ずっと福島へエールを送り続けてくれているという内容の記事であった。

米軍から原子爆弾を投下され、長崎の人々は、熱線や爆風、放射線障害による犠牲者が約七万人とも推計され、今も多くの人が後遺症に苦しんでいる。その様々な苦しみから、少しずつ復興を遂げてきたという長崎は、ずっと福島に寄り添ってくれた。約十年前、東日本大震災直後、東京電力福島第一原発事故が発生した。当時三歳だった私は、その頃の様子を母から何度も聞いた。様々な情報が飛び交う中、幼い子どもたちを抱え、これからどうしたらいいのか悩む日々が続いたという。そんな時、いち早く福島に駆け付け放射能についての知識を教えてくれたのが長崎だったと母は言っていた。放射能の怖さを一番知っている長崎は、同じ苦しみを背負うこととなった福島の復興をずっと応援し、協力してくれていたのだ。長崎というと、九州の遠い県という認識であったが、この記事を読んで、ぐっと近くに感じた。それと同時に、長崎の原子爆弾の投下、東京電力福島第一原発事故は、決して忘れてはいけない、風化させてはいけないことなのだと強く思った。原爆も原発も、「原子力」のエネルギーを使用している。原爆は、原子力のエネルギーを活用して兵器として開発されたもので、それによってたくさんの人々の命が失われた。人々の想像を絶するそのエネルギーによって、一瞬にして何万人もの人の命を奪ったのだ。この兵器の威力を目にした人々は、原子力は、人間が扱ってはいけないエネルギーであると誰しも思ったに違いない。しかし、時が経つと人々の記憶は薄れ、今度は原子力のエネルギーを電力に使用した。その結果、七十数年たった今も、また同じ放射能の苦しみを味わっている。

私は、この日本をこれから担っていく者として、原爆投下のことも原発事故のことも、しっかりと事実を受け止め、風化させず次の世代へ伝えていくことが必要であると考える。その中で、私たちが幸せな生活を送るために何が必要で、何が大切なのかを精査し、議論を重ねていくことが、これからの日本には重要であると思う。一番怖いのは、無関心であること。そうならないために、様々な人々が体験した苦しさや思いのバトンをしっかりと渡していかなければならない。

自ら考えることの大切さ

郡山五中3年　亀山（かめやま） ひかり

私は中学一年から三年の現在まで陸上競技部に所属し陸上に励んできました。大会や競技場での練習などで学法石川高校の選手を見かけると、走りの速さは勿論あいさつや立ち振る舞いに驚かされます。皆さん競技中だけでなく競技場の外でも堂々としていて、とても礼儀正しいです。今回松田監督のマイストーリーを読んで学石がなぜ立派な成績を残すことが出来るのか少し分かった気がしました。

松田監督のお話で一番印象に残っているのは自主性を重んじている所です。あの速い学石の選手はきっと毎日監督が決めた厳しい練習をこなしていると思っていました。それが週の半分以上は個人練習で全体練習でも自分がその日の調子でペースを決めることに驚きました。「自ら考える選手」とは自分で決めたことに責任を持ち、どんな結果も受け入れて次に活かすということではないでしょうか。

私は二年生までは何となく陸上に取り組んでいました。しかし新型コロナウイルスの影響で昨年は本当に大会が少なく、大会に出られることのありがたみと、いつまた中止になるか分からない今の状況ではどの大会も貴重なチャンスだということに気付きました。二年生の秋からは陸上に真摯に、そして目標を持って取り組むようになり、三年生ではジュニアオリンピック出場という目標を掲げ標準記録を突破することができました。

松田監督が選手引退後に教員を目指し大学院で勉強されたときに剣道を通じて心技体をバランスよく鍛えることの重要さを知ったとありました。「勝つには気持ちが8割」という言葉にとても共感します。どんなに練習で調子が良くても本番で弱気のときは結果を出すことが出来ません。特に高跳びは気持ちで結果が大きく変わることを実感しました。私は大会のときは今まで練習してきたから大丈夫と自分に自信を持つように心がけています。

いつも父から「どんなことでも自分で考えることが大切」と言われています。父はあまり口出しはしませんがいろいろな場面で「ひかりはどう思う？どうしたい？」と私に考えさせるような質問をします。父も松田監督と同じで自ら考える人間になってほしいと考えているようです。

陸上はスタートに立つと一人です。陸上を通して自分で考えるしかない状況を経験できたことは貴重です。私はまだまだすべて正しい判断が出来るわけではありません。でも自分で考え決めたことなら間違っても後悔しない、そしてやり直すことが出来ると思います。自分で考え判断出来るようになると自信もつき結果もついてくると信じ、これからも努力します。

高校生の部 優秀賞

声を上げる私

安積黎明高1年　戒能（かいのう） 李咲（りさ）

コロナ禍という異例の事態の中開催された東京オリンピックは、連日私達に多くの話題をもたらした。選手やメダルに注目が集まる中、「多様性」や「差別」、「誹謗中傷」といった言葉を頻繁に耳にした。今までのオリンピックとは一味違うものになっていたと感じた。

八月九日の新聞には、オリンピック選手らが「差別」や「誹謗中傷」に抗議したことが書かれていた。私はこの記事に対し、オリンピックという世界が注目している大会で、国の代表である選手が行動を起こした勇気と、それのもつ意味の大きさについて、私達は考えていかなくてはいけないと思った。この大きな出来事には、もっと目を向けていかなければならないし、これらの問題は看過されて良いものではない。私はこの勇気ある行為をもっと大きく伝えるべきだと提言する。

競技を通して国と国とが一つになることがオリンピックを開催する理由の一つである。そのために、人々は「差別」をなくし、「多様性」を認め合い、全ての人が生きやすい世の中にしていくための意識が必要なのではないだろうか。しかし、同日の他の記事にも書いてあるように、今の日本は「多様性」を主張しつつも、真の「多様性」を認め合える社会には到底及んでいないという意見が多くあがっているのが現実である。

「差別」や「誹謗中傷」などの問題は、オリンピックという非日常の中でより指摘されたからといって、非日常の出来事として済ませるのではなく、今までの日常の中でも起こっているということを忘れてはいけない。私にとって、今回のオリンピックは、そのことを気付かせてくれたかけがえのない大会であった。

「誹謗中傷」の多くはネット上で起こっているとされている。SNSの普及により、情報のやりとりが容易になったことで、ネットの使い方により一層注意していかなければならないということを戒めてくれる。ネットを使って生活している私達は、いわばそういった問題の当事者であることを自覚しなければならない。

オリンピックで選手たちは声を上げ、私達にきっかけを与えてくれた。選手たちの声を受け、私達には今何ができるのか、何をすべきなのか。東京五輪から学んだことを活かし、日々自分自身に問いかけていきたい。

私にとって日常とは発見である。情報にあふれた毎日の中の発見一つ一つが組み合わさることで世界そのものが見えてくる。選手たちが声を上げたように、私はその発見一つ一つを大切にし、自分の声で伝えていきたい。

「全ての人が生きやすい世の中をつくる」

温室効果ガスと人類

学法石川高2年　増子（ましこ） 梢恵（こずえ）

私は、温室効果ガスによる気候変動とそれに対しての対策や原因について書かれた記事を選びました。この記事には「人類が破滅的な気候変動の要因であることは明らかだ。」と書かれています。私はこの一節を読んで、ホセ・ムヒカ氏の国連演説を思い出しました。彼はウルグアイの元大統領で「世界一貧しい大統領」と呼ばれています。彼は演説で「行き過ぎた消費主義こそが地球を傷つけ、さらなる消費を促しています。」と言っていました。私はこれを聞いて、温室効果ガスをゼロにすることが困難なことに、消費主義が関連しているのではないかと思いました。そもそも消費主義というのは、一体何なのでしょうか。これは、財やサービスの購入を勧め、消費させる経済政策のことです。

世界の国々は、より多くのものを生産し、消費することで「経済が回っている」という状況を作り出しています。聞こえは良いですが、これこそが温室効果ガス削減の足枷となっているのだと思います。例えば、CO_2削減のためにガソリン車の製造を中止するとします。この場合、ガソリンの需要は減ります。これは、石油の需要が減ることと同義です。石油は経済に大きな影響を与えています。それゆえに、石油の需要の減少は、景気後退に直結します。これが、なかなかガソリン車の完全廃止に踏み切れない原因なのではないでしょうか。つまり「石油が消費できないと不景気になるから、石油をどんどん消費しなければならない。」という考えになってしまうのです。

温室効果ガスが問題視されるようになってから、何十年も経ちました。その間、様々な対策が考案されてきましたが、決定的な効果を得られたことはありません。それは、私たち人類が、未だに消費主義に囚われているからです。しかし、消費主義を完全に否定することはできません。理由の一つとして挙げられるのは、買い物です。趣味が買い物という人の多くは、消費することで満足感を得ています。いわゆる「買い物欲」というものを満たしているのです。また、インフルエンサーによるエンターテインメントも理由の一つとして挙げられます。例えば、フードファイターがもの凄い量の食べ物を食べているテレビ番組があったら、人々はそれを見て楽しみます。このように、消費することによって幸福感を得られる場合もあるのです。けれども、消費することで得られる幸福には、代償を伴う可能性があります。むしろ代償の方が大きくて、それが環境問題に繋がり、自分の子供や孫、その先の世代を苦しめてしまうこともあるのです。温室効果ガスの削減かそれによって起こり得る景気後退か。今一度環境問題について考え、優先すべきことを見極めたい。

愛と覚悟

福島商高2年　佐藤（さとう） 葵（あおい）

「バレエの道で生きていきたいと親に頼んだのです。」

私はこの一文に心を打たれました。小学六年生にしてこのような大きな決断をすることは容易ではないと考えるからです。

私にも、やりたいこと、やっていること、情熱を注いでいるもの、将来の夢はあります。でも、親に「この道で生きていきたい。」と胸を張って言えるほどではありません。気持ちの面では、本当に自分にできるのか、向いているのか、続けられるのか不安なうえ、どうせ自分にはできないと諦めている部分があります。経済面ではやはり、お金に関することが心配になってしまいます。だから、小学六年生にして将来の道を決定するのはすごいと思いました。

しかもそれだけではありません。その道をずっと貫き通さなければいけないのです。飽き性の私には到底できないと思います。それを森下さんは七十年もやってのけたのです。私は相当な覚悟とバレエへの愛があったのだろうと感じました。実際に、真冬の滝行や食事の準備、お茶やお花、お経を読んで座禅を組んで精神統一など厳しい練習ばかりで想像しただけでも吐き気がします。今の時代ではパワハラと言われてしまいそうなことなのに森下さんは、逃げずにやり続けていて肝が据わっていて素晴らしい方だと思いました。

文章からわかる通り、「教えていただき」「聞かせていただいた」「稽古できるのがとてもうれしかったのです」といった言葉から、橘さんへの深い敬意が感じられ、どのような練習でも嫌だと思うことはなかったのだろうと思います。バレエと橘さんへの愛がとても深いのだと感じました。

長い月日、同じ道で生きることに必要なものはきっと、愛と覚悟だけではないでしょうし、人それぞれ違うと思います。そもそも、月日なんて大切ではないでしょう。それでも私は七十年ずっとバレエの道を進んできた森下さんが、バレエの道で生きていくことを決めた森下さんがかっこいいし、素敵だと思います。

私ももう、進路を決めなくてはなりません。きっとたくさん悩むだろうし、妥協することもあるだろうけど、自分らしく生きれる道を進めるように、いろんな人の人生を調べてみたいと思います。そしていつかは、森下さんのように「○○の道で生きていきたい。」と親に頼めるように覚悟を決めて愛をもって、胸を張って言えるように、周りの人からも応援してもらえるようになりたいです。

これからの人生を楽しく、かっこよく生きていけるように、やりたいことをたくさんやりたいと思います。